# ある日、ぶりっ子悪役令嬢になりまして。2

桜あげは

Ageha Sakura

Regina

RB

レジーナ文庫

登場人物紹介
フラウ
本来の乙女ゲームのヒロイン。革命を起こすため暗躍している。
アサギ
フラウに協力する少年。彼女に大きな恩がある。
オーレリア
アシルの家のメイド。中身は55歳のおばちゃん。
ライガ
ロイスの従兄弟。口は悪いが面倒見が良く、ロイスたちに手を貸してくれる。
トライア
トパージェリア国の第二王子。カミーユに執着している様子を見せるが……？
ベアトリクス
トライアの元護衛。突然ロイスと婚約することになり戸惑っている。
ロイス
ガーネット国の王子。賢く穏やかな美少年だが、隠密技能を持つ変わり者。
カミーユ
ゲームにおける悪役侯爵令嬢だが、今の中身は元女子高生の愛美。恋愛ごとには免疫がないけれど、魔法の腕は抜群な残念女子。
アシル
カミーユの幼馴染で、ロイスの腹心。婚約者であるカミーユを何よりも大事にしている。

# 目次

ある日、ぶりっ子悪役令嬢になりまして。2　7
書き下ろし番外編
ハートのQ（クイーン）　新婚生活を送る　377

ある日、ぶりっ子悪役令嬢になりまして。2

## 1　ハートのQ、実家に帰省する

窓から降り注ぐ日差しが厳しくなり、急激に気温が上昇する――季節は夏だ。

寮の窓越しに外の景色を眺めると、前庭に植えられている植物が元気よく蔓を伸ばし、色とりどりの花を咲かせている。学園で生活する生徒達の服装も、涼しげなものに変わり始めていた。

私、カミーユ・ロードライトは朝からハート寮にある自室で、婚約者であり幼馴染のアシルと寛いでいる。お互いの部屋が割と近くにあるので、授業が休みの日は、こうして行き来することが多いのだ。

それにしても、まさか、アシルと両思いになる日が来ようとは……

この世界へ来た当初の私は、そんなことを考えつきもしなかった。

誰かと恋をすることになっても、アシルだけはナイと思っていたのだ。

私を破滅させる相手だったはずの、彼だけは――



以前の私は、乙女ゲームという趣味を持った、ごく普通の日本の女子高生だった。本名は、相沢愛美。

ある日、学校の非常階段から転落した私は、気が付けばこの乙女ゲームの世界へトリップしていた。

乙女ゲームというのは、女性向けの恋愛ゲームの中で、男女の恋愛をテーマにしたジャンル。プレイヤーがゲームのヒロインを操作し、攻略対象と呼ばれる男性キャラクター達と疑似恋愛を楽しむというものだ。

当時、私のお気に入りだったタイトルは、『キャルト・ア・ジュエ』という、トランプをモチーフにした世界観のゲームだった。

ゲームの舞台となっている魔法学園には、ハート、ダイヤ、クローバー、スペードという四つのクラスがあり、それぞれに恋愛攻略対象であるK、恋敵であるQ、友情攻略対象であるJと呼ばれるキャラクター達が存在している。

編入生であるヒロインは、学生生活を通して攻略対象達と仲良くなるのだ。

私は、そんな世界にトリップし――あろうことか、ゲームの中の恋敵キャラクター、カミーユ・ロードライトと入れ替わってしまった。

カミーユは、嫌われ者のぶりっ子悪役侯爵令嬢。

ゲームの攻略対象の一人であるガーネット国の王太子――ロイス・ガーネットとの恋愛、つまりハートのKルートを進めると登場し、ヒロインの恋路の邪魔をする。最後は悪質な嫌がらせがバレて社会的に抹殺されるという、哀れでお馬鹿なお嬢様だった。

そして、カミーユを罰したのが、王太子の側近である子爵令息――アシル・ジェイド。

幸い、私が入れ替わったカミーユはまだ五歳時点。

破滅するのは十六歳なので、猶予があった。そこで私は自身の破滅を回避しつつ、この異世界に来て興味を持った魔法を極めることにしたのだ。

しかし、どうもこの世界はゲームとは違う部分が多数存在するらしい。

幼少期に出会ったアシルと仲良くなった私は、天敵であるはずの彼に好かれて……あろうことか、アシルと恋人同士になってしまったのである。

似通っている部分が多くとも、ここはゲームと全く同じ世界ではない。登場人物それぞれが、意思を持って現実を生きている。そのことに気が付いた私は、彼らをゲームの登場人物と同一だと考えることをやめた。

私は今、複雑な思いで隣に座るアシルの顔を眺めている。

ゲームに登場するアシルと同様に、キャラメル色の髪とコバルト色の瞳を持つ甘いマスクの彼。ゲームではカミーユを冷たい目で見ていたけれど、今、私を見つめるその表



情はどこまでも穏やかだ。思わず頬が熱くなる。

アシルは、この先も絶対に私を破滅させたりはしないだろう。そう確信出来る。

「なに？　どうしたのカミーユ？」

「ううん、なんでもないよ。ちょっと考えごとをしていただけ」

「ふぅん？　せっかく一緒にいるんだから、考えごとをするよりも俺を見てほしいんだけど？」

アシルはキャラメル色の髪をかき上げながら、こちらに流し目を送ってきた。相変わらず、私の婚約者の色気は凄まじい……

ガーネット国を震撼させた王太子の誘拐事件は一段落し、今は、城の者達が事後処理に当たっている。

事件の犯人であるティト伯爵と娘は、城の地下牢で厳しい取り調べを受けていた。伯爵は今でも否認しているが、娘のクレールは不気味なほど大人しいらしく、そのことが少し気にかかる。彼女は、何者かによって禁術と呼ばれる精神に作用する魔法をかけられていた。

クレールに禁術をかけた犯人が誰なのかは、まだわかっていない。

ちなみに誘拐事件が解決したあと、ロイス様の従兄であるライガが、私宛に「禁断魔

法全集」という素晴らしい魔法書を送ってくれた。ロイス様と共に捕らえられていたライガの側仕え兼婚約者であるメイを救ったお礼ということだそうだ。

ライガから貰ったこの本は、禁術がまだ規制されていなかった時代の書物で、今は公になっていない魔法がたくさん収録されているヤバい品だ。魔法オタクにとって嬉しすぎるプレゼントに、私は貰った直後、興奮しすぎて震えが止まらなかった。

一連の事件の元となった国王派と王弟派の権力争いは、相変わらず続いている。簡単に収まるものだとは思わないけれど、ロイス様やメイがあんな目に遭った今となっては、いい加減にして欲しい。

協力して事件を解決したこともあり、国王派の私達と王弟派のライガは、以前のような険悪な関係ではなくなった。メイも、アシルやロイス様に対して苦手意識を抱かなくなってきている。

ただ、ロイス様誘拐の実行犯であるメイの双子の弟――カイは、追っ手を撒いて逃走中だ。

まだ事件の影響はあるけれど、これから、学園は夏期休暇の時期に入る。

多くの生徒は休暇の間、実家に帰省するらしい。私やアシル、ロイス様も例に漏れずだ。

久しぶりに侯爵邸に帰れるとあって、私の気分は高揚していた。本来の自分の家では



ないとはいえ、十年以上も慣れ親しんだ侯爵邸は、今では安心できる場所のひとつになっている。

しかし、向かいのソファーでティーカップを手にしているアシルは、帰省するのが嫌なのか、その話になるたびにとても不満そうな顔をしていた。彼は、実家の子爵邸が好きではないのだ。

母親が平民のアシルは、幼少期から義母と腹違いの兄に庶子だと馬鹿にされ、子爵邸で冷遇されてきた。彼を引き取った父親はといえば、妻との不仲が原因で女性の家を渡り歩き、子爵邸には滅多に帰らない始末。

過酷な環境の中、アシルは自分で自分を守るしかなかった。それは、実家嫌いにもなるだろう。

そんな子爵家の中でアシルに手を差し伸べたのが、彼の腹違いの姉と妹だ。二人には母や兄に対抗出来る力はないけれど、いつもアシルのことを気にかけ、さり気なく庇っていた。

そのアシルの姉、デボラがこの夏期休暇中に結婚する。

私の友人でもある彼女は、私達が学園で生活している間にスピード婚約を成し遂げていたのだ。

デボラのお相手は、なんと年下の平民の男性で、城に勤めている衛兵の一人らしい。彼女は幼いころからずっと玉の輿宣言をしていたのに、まさかの展開だ。彼女から結婚式の招待状も届いているので、これはぜひとも相手の男性を見てみたい。

数日後、夏期休暇に入った私は侯爵邸に戻った。

「お帰りなさいましっ！　カミーユ様！」

玄関に入った瞬間、侯爵家のメイド長であるエメに激しいタックルを決められる。私が学園に行って寂しかったらしい彼女は感極まり、背中に回した腕で体を締め付けてきた。大変恰幅のいいエメの大歓迎に、私の内臓が悲鳴を上げている。

「ぐうっ！　ただいま……エメ。く、苦しい……」

「カミーユ様、しばらく見ない間に一段とお美しくなられて……きっと、アシル様のお力ですわね！」

ギクリ……！

エメに指摘された瞬間、私は固まってしまった。

「そ、そうだ！　デボラのお祝いに行かなきゃならないんだった！」

恥ずかしいので、私はエメがこれ以上なにかを言い出す前に逃げることにした。



「そうですわね、デボラ様は未来の義姉君となる方ですものね！　いいですかカミーユ様、ご自分が結婚なさる時の参考に、しっかりデボラ様のお話を聞いて来るのですよ！」

どうやら、ヤブヘビだったようだ。いつになく気合の入っているエメは、まん丸な体を揺らしつつ嬉々としてデボラ訪問の準備に取りかかった。

ロードライト侯爵邸からほど近い位置に、ジェイド子爵邸はある。ロードライト侯爵邸ほどの敷地面積はないものの、きちんと手入れされた庭園が見事な、美しいお屋敷だ。

私は、お祝いの品を大量に用意してデボラに会いに行った。

「デボラー！　結婚おめでとう！」

私を快く迎え入れてくれたデボラは、少しほっそりして、より女性らしくなっている。彼女はフリルがたくさん付いた扇で口元を隠しながら顔を赤らめていた。父親のソレイユと同じ水色の長い髪を片側に垂らして目を伏せる仕草は、とても可愛らしい。

通されたロココ調の客室で、私達はさっそく会話に花を咲かせた。

「ありがとうカミーユ……こんな風に祝福してもらえるなんて、私は幸せだわ」

「ねえ、デボラのお相手はどんな人なの？」

私は好奇心の赴くまま、彼女に結婚相手のことを尋ねた。

「……優しい人だわ。貴族の男達なんかよりも私を大事にしてくれる。お母様とお兄様

はこの結婚に反対しているけれど、お父様とデジレは喜んでくれたの」
この世界の平民達は、恋愛結婚が主流だ。一方、貴族達の殆どは愛のない政略結婚だという。私とアシルのような婚約は、稀な例なのだ。
ジェイド家の当主であるソレイユは、アシルの母親のあとにも複数人の愛人を作っており、そのうちの一人を子爵家に住まわせるかどうかで、夫人と盛大に揉めている最中だとか。
そんな環境で育ったデボラが、彼女の望むような結婚が出来て本当によかったと思う。
「カミーユこそ、アシルとうまくやっているのかしら？」
「うっ……！」
私がしみじみとしていると、デボラが笑って言い出す。急にこちらに矛先を向けないでほしいんだけどな……
デボラは、焦る私を見て面白そうに目を細めている。そういう仕草は弟とそっくりだ。やはり、彼女はアシルの姉だと再認識してしまう。
「アシルは器用だけれど、あなたに対してはお得意の計算が出来ないみたい。根はいい子だから仲良くしてあげてね」
「も、もちろんだよ……」



私とアシルは、当初は思惑がすれ違っていた婚約関係だったものの、今では完全な両思いになっている。
デボラにはそのことを伝えていないが、弟と同様、彼女の観察眼は鋭い。恐らくバレているだろう。
しどろもどろになりながらデボラと話をしていると、背後で扉がガチャリと音を立てて開いた。
「カミーユ、来ていたんだね」
「ア、アシル⁉　……お邪魔しています」
振り向けば、貴族服を着崩した休日仕様のアシルが扉にもたれかかっていた。相変わらず、無駄に色気を垂れ流しているなぁ……
「俺を放置して先にお姉様に会っているなんて。酷い婚約者だ」
言葉とは裏腹に、私へにこりと笑いかけるアシル。その微笑みが逆に怖い。
ヤバい……これは、彼がなにかを企んでいる時の顔だ。
「アシル……ごめん、うぉわっ⁉」
とりあえず謝ろうと思ったのだが、私は最後まで言葉を発することができなかった。
真横に腰かけたアシルが、デボラの前だというのに思い切り私を抱きしめてきたからだ。

腕に力を入れて、アシルから距離を取ろうとしたものの……いつの間にか、私は彼に腰をガッチリとホールドされ、逃げられなくなっていた。おのれアシル、こんな場面でも抜け目なしとは！

恨みがましい視線を送る私に、彼は蕩けるような笑顔を向ける。

私は真っ赤になってアシルに抗議した。

「デボラの目の前で、こんな恥ずかしいことをするなんて……」

けれど、彼の甘い表情を見てしまったあとでは、非難する声も自然と小さくなってしまう。

「カミーユ、私のことは気にしなくていいわよ。二人とも仲がいいのね」

「……ちょっと、デボラっ!?」

デボラは、扇を口元に添えて満足げに微笑んだ。普段見ることのないアシルの豹変ぶりと、私の慌てぶりがお気に召したのだろうけれども……笑っていないで、あなたの弟を止めてください！

「アシル、あなた達がうまくいってよかったわ。これで、私も安心してお嫁に行けるわね」

「ご心配なく、お姉様」

「ちょ……二人とも、なに姉弟で会話を完結させてるの!?」



この姉弟、やはり似ている!!

結託した彼らに、私は手も足も出ないのだった。

それから数日後。国内で最も由緒ある教会のひとつで、デボラの結婚式が厳かに行われた。

アイスブルーの涼しげなドレスを着た私は、まっすぐに教会の奥へ進む。教会までは父と一緒に来たのだが、父が外でデボラの父ソレイユと話し込んでいるため、一人で先へ進むことにしたのだ。

デボラに会いに控え室へ向かうと、純白のウエディングドレスを纏った彼女が姿を現した。今日のデボラは、エンパイアラインのシンプルなドレスを着ている。

「デボラ、すっごく綺麗だよ！」

「ありがとう、カミーユ」

私の言葉に、デボラは幸せそうに笑った。彼女をこんな風に穏やかにした新郎の顔を拝むのが、ますます楽しみになってきたな。

デボラの控え室から出た私は、教会内で貴族や、新郎の招待客である衛兵達と談話しているアシルを発見する。

「カミーユ、お姉様に会っていたの？」
控え室より出て来た私を見て、アシルが相好を崩す。
私に心からの笑みを向けてくれる婚約者。そんな彼に、私は柄にもなくドキドキした。自分が彼にとって特別な人間になったような気がして、面映い。
それに、カッチリとした礼服に身を包んだ彼は、ちょっと格好よかった。
アシルに見とれていると、彼と話をしていた衛兵達がチラチラと私に視線を向けてきた。……なんだろう。このドレス、似合っていないのかな。それとも私の顔になにか付いているとか？
気になって彼らを見つめ返す私の手を、傍にいたアシルが強く引っ張る。
「座ろう、カミーユ。そろそろ式が始まりそうだよ」
「え、うん……？　そうだね、アシル」
私は、アシルに手を引かれたまま座席に向かい、彼の隣に腰かけて新郎新婦の入場を待つ。私が席に着いても、衛兵達はチラチラとこちらに視線を投げかけてきた。今日は神聖な結婚式ということもあって、魔法刺青はすべて消しているので目立たないはずなのになあ……
「カミーユ、さっきからどこ見てんの？」



何故か不機嫌そうな声音のアシルに、私は強く抱き寄せられる。公衆の面前でこんな風に引っ付かれて、ちょっと恥ずかしい。そんなアシルの隣では、彼の妹であるデジレがニヤニヤと私を見ていた。デボラにしても、デジレにしても……ジェイド家の子供達は、この表情がデフォルトなのだろうか。
「……デジレ、どうかしたの？　私になにか言いたいことでも？」
「私が言うことじゃないかもしれないけど……カミーユは、もうちょっと危機感を持った方がいいと思うわ。刺青を消したあなたは、タダの美少女なんだから」
彼女の言葉に私が首を傾げていると、教会全体にパイプオルガンの音が厳かに鳴り響き、新郎が入場してきた。私もデジレも、口を閉じてチャペルの入り口に目を向ける。
新郎は、アッシュブロンドの髪の爽やかなイケメンだ。デボラ、いい人を見つけたね。
続いて、ソレイユに手を引かれたデボラがしずしずと入って来る。壇上に上がり、新郎と並ぶ彼女は、とても幸せそうに見えた。
「いい式だね」
隣にいるアシルへにっこり微笑むと、抱き寄せられていた腕の力が強まった。
デジレは、感動のあまり盛大に涙と鼻水を流しており、私までもらい泣きしてしまう。
私の様子を察知したアシルが、一度体を離してハンカチを取り出し、溢れた涙を拭い

てくれた。相変わらず、彼は面倒見がいい。
「ありがと、アシル……」
それでも泣き止まない私をアシルが抱き寄せ、よしよしと優しく頭を撫でてくれる。
泣き崩れた顔を晒すのも気が引けたので、私はアシルに抱き寄せられるまま式の間中、彼の肩に顔を埋めた。
披露宴は、教会の近くにある子爵家別邸で盛大に行われることになっている。本日の主役を待つ会場では、これでもかというくらい着飾ったデボラの母が、貴族の招待客に愛想を振り撒いていた。
披露宴が始まるまで、私はアシルにエスコートされて別邸の庭を散歩することにする。
近くの小さなテーブルの上には色とりどりのカクテルが置かれていた。だが、入学式で酔っぱらってしまったという苦い記憶を思い出した私は、それらには手を出せない。
「アルコールの入っていない飲み物を持って来ようか？」
手持ち無沙汰な様子の私を見ていたアシルが、優しい声音でそう言ってくれた。
「アシル、ありがとう。でも、大丈夫だよ」
「遠慮しなくていいよ、ついでに自分の分も貰って来るから。そんなに離れていないし」
アシルが指差す方向を見ると、建物に入ってすぐのテーブルにジュースなどが入ったグラスが置かれている。
「カミーユ、そこで少し待っていて」
そう言うと、アシルは人ごみを避けて目的のテーブルへ歩いて行った。
「……優しいな」
そんなことを考えながらアシルの方を見ていると、飲み物の置いてあるテーブルの近くで、彼が令嬢達に囲まれてしまった。見慣れた光景とはいえ、複雑な気分だ。
美形で愛想のいいアシルは、異性からとてもモテる。今は令嬢達に苦笑しつつ対応しているけれど……アシルもアシルだ。そんな風に愛想を振り撒くから、付き纏う令嬢があとを絶たないのだと思う。
なんだかモヤモヤした気分になった。これが嫉妬というものなのだろうか。
（以前の私なら、モテモテなアシルを揶揄うことさえ出来たというのに……！）
今は、ゲームの中の本物のカミーユの気持ちがわからないでもない。彼女も、こういった思いを抱いていたのだろう。
だが、私は彼女のように、他の令嬢へ攻撃を加えたりはしない。
「よし、正面から普通にアシルを連れ戻すぞっ」
しかし、勇ましく一歩を踏み出した私は、背後から突然声をかけられて足を止めた。

「カミーユ嬢、もうすぐ披露宴が始まりそうですね」
私は振り返り、声をかけて来た人物を見つめる。そこには丸々と太った巨体に、父親と同じ水色の髪を持ったジェイド子爵家の長男、ドミニクが立っていた。
ドミニクは、アシルの腹違いの兄なのだが、庶子である弟のことをあまり好いてはいない。幼少からアシルと繋がりが深かった私とも関わりのなかった人間だ。その彼が、私に一体なんの用なのか。
この日のために誂えたのであろう、新品の黒い正装に身を包んでいるドミニク。彼の姿は、日本にいた時に読んだ物語に出てくるハンプティーダンプティーに酷似している。
「よろしければ、あちらでお話ししませんか？　アイツも、向こうで楽しく会話中みたいですし……」
私がチラリとアシルに目を向けると、彼はまだ令嬢達と歓談中のようだ。……一体、いつまで喋っているつもりなのだろう。
「……少しだけならいいけど」
私は、一旦ドミニクについて行くことにした。すぐに戻れば問題ないだろう。彼も一応デボラの兄だ。妹の披露宴について、私に伝えたいことがあるのかもしれない。
私は、ドミニクに庭の外れの東屋まで連れて来られた。カクテル片手に歓談する他の



客達の声が遠くから聞こえてくる。
「ドミニク、なにか私に用事？」
私の問いかけに、ドミニクは脂肪に包まれた両手を握り合わせながら答えた。
「はい。前々からお聞きしたいことがあったのです。カミーユ嬢は、あんな庶子のどこがいいのでしょうか」
「庶子って……アシルのことだよね？」
「あなたは騙されている。あいつは、あなたを利用しているのです！　すべては、より高い地位を手に入れるために……！　あの男は、次期侯爵の地位にしか興味がない。どうせ先程も、将来の愛人候補の女性を見繕っていたのでしょう。今ならまだ間に合う！奴との婚約は解消すべきです！」
ドミニクは心から私を心配して、アシルとの婚約解消を勧めている様子だ。
「あの庶子は、昔から打算でしか動かない男なのですよ」
確かに、出会ったころのアシルは、打算だらけの生意気な子供だった。
でも、今はそれだけではないこともわかっている。彼は、私をちゃんと想ってくれているのだ。
「私は、アシルとの婚約を解消するつもりはないよ？　アシルが打算的なのも野心家な

のも知っているけれど、いいところもあるし、私も彼のことは嫌いではないし――」
恥ずかしさで真っ赤になっているだろう頬を両手で押さえながら言う。
ドミニクは、私の返答がお気に召さなかったらしい。ブルブルと打ち震えた彼は、強い力で腕を掴み、私を東屋の壁に押し付けた。
「痛っ……！」
「認めない、認めないぞ。あいつが俺よりも上の地位に就くなんて。俺の欲しい物をなんでも奪っていくなんて！」
そう言いながら、ドミニクは両手でギリギリと私の腕を締めつけてきた。
（魔法を使ってドミニクを弾き飛ばした方がいいかな……？）
でも、デボラの結婚式なので騒ぎになるような真似は避けたい。
「静かにしていてくださいね、カミーユ嬢。騒ぐと人が来ますよ？　こんな場面を見られたら、どんな噂が立つでしょうね」
ドミニクの巨大な顔が目前に迫る。どんな噂が広まるか知らないが、私にとって非常に都合が悪くなることは確実だ。
「アシルには渡さない、全部私が手に入れる！　侯爵の地位も、カミーユ嬢も！」
荒い息と共に、汗にまみれたドミニクの体が密着してきた。ちょっとベタベタする。



（やっぱり、ここは魔法を使った方がいいよね）
私は、すぐにドミニクに向けて魔法を放つ用意をした。
「いい加減にしてよね。変なことばっかり言っていないで、妹をお祝いしてあげて！」
すると、言い争う私達の声を聞きつけたのだろうか、一人の女性が声をかけてきた。
「すみません、もうすぐ披露宴の時間ですよー！　会場まで移動してくださいねー」
声のした方に視線を動かすと、黒髪をお下げにして眼鏡をかけたメイドが立っている。どうやら彼女は、参加者達に披露宴の開始を知らせて回る係のようだ。
「なんだ！　メイドの分際で、私に指図をするな！」
メイドの言葉でドミニクの気が逸れた瞬間、私は彼に向けて拘束魔法を放った。
拘束魔法は相手の手足の自由を奪うもので、主に罪人に対して使われる。両手両足を魔力の縄で縛られたドミニクは無様に地面に転がり、血走った目で私を睨んだ。
私が倒れたドミニクをどうしようか思案していると、誰かが駆け寄って来る足音が聞こえてきた。
「カミーユ、大丈夫!?」
やって来たアシルが、息をきらしながら私の顔を覗き込んでくる。会場からここまで、全力で走ってきたみたいだ。

「ドミニクに迫られているカミーユが見えて焦った。ごめん、一人にして」
「平気だよ、ドミニク一人くらい撃退出来るし。私こそ勝手に移動してごめんね。アシルが女の子達に囲まれて楽しそうにしているのを見たら、ちょっとモヤモヤしちゃって……」
「別に、楽しんでいたわけじゃないけど、それって……」
常にポーカーフェイスのアシルの顔に、僅かに赤みがさした。
「なんや。東屋でカップルがイチャついとるんかと思ったら、こっちが本命やったか」
不意に聞こえた声に、私は慌ててアシルから離れようとしたが、彼の腕が私の背中に回りそれを阻止する。仕方がないので、彼に引っ付いたまま声の方を振り向く。
声の主は、先程声をかけてきたお下げに眼鏡のメイドだった。よく見ると美人だ。
(なんだか見覚えのある顔だけれど……どこかで会ったっけ?)
私が悩んでいると、アシルがそのメイドに話しかけた。
「そこのあなた。この男を、地下室まで運んでいただきたいのですが……」
「ええっ……!? 私ですかぁ!?」
メイドが慌てて返事をする。なんだか慣れていない様子だ。新人さんかな?
「僕はアシル・ジェイド。この家の次男です。運び終えたら、僕まで知らせてください」



「は、はいぃ! 一人では無理なので、人を呼んできます」
メイドはアシルに一礼すると、建物の中へと走って行った。たしかに、ドミニクの巨体を女性一人で運ぶのは無理があるだろう。
アシルに手を引かれながら、私は披露宴の会場へ戻る。この後、デボラは四回もお色直しをして招待客達を騒然とさせた。こういうところは、昔と変わらない。
その後は、別邸のアシルの部屋に招かれた。そのまま帰宅してもよかったのだけれど、父がもう少しソレイユと話をしたいそうなので、私もアシルの部屋に上がらせてもらうことにしたのだ。ドミニクの様子も気になる。
別邸のアシルの部屋に来るのは初めてだ。本邸のアシルの部屋は、落ち着いた茶色を基調とした部屋で、こちらはモノトーンのシックな部屋である。見慣れないせいか、なんだか落ち着かない。
その原因は、隣にいる色気満載の婚約者のせいかもしれないのだけど。
「さっきは、本当にごめん。すぐに抜け出せなくて……カミーユに嫌な思いをさせてしまったね」
「もういいよ。アシルは昔からご令嬢達には愛想がいいもんね。今更妬いたりしないし」
嘘である。しっかり、ヤキモチを焼いていた。でも、アシルに素直にそんなことを言

うのは恥ずかしい。
「妬いてくれていたんだ？　心配しなくても大丈夫だよ、俺はカミーユ以外の女に興味ないから」
私はアシルの鋭さに舌を巻いた。ダメだ、彼に隠しごとを出来る気がしない。
「もう他の令嬢に愛想を振り撒いたりしないから、機嫌を直してくれる？」
「だ、だから……妬いていないんだってば――」
しかし、私が言い終える前にアシルが強引に距離を詰めて……気が付けば、私は彼に唇を奪われていた。
それだけではない。いつの間にか私の唇を割ってアシルの舌が侵入し、口内を撫で回されている。
（アシルさん、キスするたびに、どんどん行為がエスカレートしていませんか!?）
叫び声を上げたいが、アシルに口を塞がれているために呻き声しか出てこない。
（まずい、まずいぞ!?　恋人の部屋でこんな雰囲気になってしまうなんて、結婚前なのに……！）
私の焦りが天に通じたのか、彼のキスが更に深く激しくなってきたところで、勢い良くゴンゴンと部屋の扉がノックされた。



「すいまっせぇーん！　地下室の鍵持ってきましたよぉー！」
張りのある、若い女性の声だ。
（た、助かったぁ……）
すぐ傍でアシルが、小さく舌打ちしたのが聞こえた。彼は、名残惜しそうな表情で私から離れると、早足でドアに向かう。
「……ご苦労様」
アシルがドアを開けると、そこには先程のメイドの女の子が立っていた。やっぱり、見覚えのある顔だ。考え込む私に、アシルが彼女を紹介してくれた。
「カミーユ、うちのメイドだ。名前は……オーレリア・トレーフルという」
「え、そうなの？　さっきは声をかけてくれてありがとう、オーレリア」
そうだ！　オーレリアって……！
私の頭の中を、過去のゲーム知識が駆け巡る。
彼女はゲームに登場する悪役令嬢の一人、クローバーのQだ！　あまりにも雰囲気が違うので気が付かなかった。
ゲームでのオーレリアは、大人しい気質の秀才少女。彼女は、クローバーのK――アサギ・ライザルを攻略対象として選択すると登場し、ヒロインの邪魔をしてくる平民の

女子生徒だ。生真面目で若干根暗な彼女は、眼鏡を取るともの凄く美人なのである。
オーレリアは他のライバル達とは違い、直接ヒロインに絡んだり文句を言ったりすることはない。
しかし、陰では周囲にバレないように陰湿な嫌がらせをしかけてくる。テストの日にヒロインの大事な魔法書を隠したり、学園祭で着る予定だった衣装をビリビリに引き裂いたり、好きな相手からの贈り物を盗んだり……
最終的に彼女の嫌がらせは、ヒロインを物理的に傷つける域までエスカレートする。その大がかりな嫌がらせがアサギ達にバレて学園を退学させられるのだ。
その後、クローバーのKであるアサギとヒロインは、めでたく結ばれる。
魔法学園の入試に落ちたという情報は手に入れていたけれど、まさかこんな場所でメイドをやっているなんて思いもしなかった。
スペードのQであるメイも、ダイヤのQであるベアトリクスも、私と同じ場所から来た異世界の人間だ。ということは、このオーレリアもそうなのだろうか？
（彼女は、ゲームとは正反対の明るい性格みたいだし）
今すぐそのことを質問したいのだが、この場にはアシルがいる。彼には、私が別の世界の人間だったということは話していない。今更話すのも微妙だし、真実味がなさすぎ



るからだ。
「オーレリアは、この別邸で勤務しているの？　本邸に来る予定はない？」
「行く予定はないですねぇ。一応住み込みやけど、実家から近いっていう理由で勤めてるし」
別邸だと、むやみに訪問することは出来ない。
（……なら、後日に今日のお礼も兼ねて別邸を訪問するという作戦で行こう）
私は、心の中で今後の計画を立てた。
「そういえば、ドミニクは、あのあとどうなったの？」
「あの人やったら、拘束された状態のままで地下室に運んでいますけど？」
私は彼女の言葉に頷くと、アシルの方へ向き直った。
「アシル、ドミニクが閉じ込められている地下に行きたいんだ」
「でも、カミーユ……ドミニクに会っても大丈夫なの？　酷いことをされたあとなのに」
私を心配してくれているのだろう。アシルは、優しく私の肩を撫でながら尋ねた。
「……大丈夫だよ。少し様子を見るだけだから」
そうして私とアシルは、一緒に地下へ向かうことになった。

階段を下りて地下室の扉を開けると、正面の床に丸太のような体のドミニクが横たわっている。

拘束魔法をかけられているドミニクは、ピクリとも動かない。

辺り一帯には、地下特有の湿気た空気の臭いが漂っていて、なんというか、シュールな光景だ。

「ドミニク……？」

私はドミニクに恐る恐る話しかけたが、彼の目は私の後ろにいるアシルへ向けられている。

「この庶子がぁ……っ！　どうやってカミーユ嬢に取り入った!?　彼女は私のものだ！」

「……はぁ？　寝ぼけるのも大概にしてくださいよ、お兄様。あんまりふざけたことばかりぬかしていると、本気で潰しますよ？」

アシルは、冷たい声でドニミクに言い放った。日頃の恨みも相まってか、彼の地の性格が出てしまっている。

「このままドミニクを転がしておくわけにもいかないよね。どうしようかな……あ、あれって!?」



何気なく私が目を向けたドミニクの首元に、なにか模様が浮かんでいる。

「これ……禁術の痣じゃないの!?　どうしてこんなものがドミニクの首に!?」

私の言葉に、アシルも素早く兄の首元を確認する。

「本当だ。あの伯爵令嬢の首にあったのと同じ模様だね」

「そうだね。クレールにかけられていた禁術はふたつだったけれど、ドミニクはひとつだけみたい」

事件のあと、クレールの首筋には禁術をかけられた痕が残されていた。ひとつは、憎悪の感情を増幅させるもので、もうひとつは私にもわからない禁術だ。

禁術は精神に作用する魔法なので、扱いには細心の注意を必要とする。だから、もうひとつの禁術があきらかになるまでは、迂闊に彼女の禁術を解くことは出来ない。

今は禁術の知識を得るために、自由に城や街の図書館の禁術書コーナーへ入れるよう、ロイス様に取りはからってもらっている最中だけど……正式に閲覧許可が出るまでには、まだ時間がかかるそうなのだ。

幸い、ドミニクにかけられていたのは、憎悪を増幅させる禁術だった。これなら、今の私でも対処できるだろう。

「ドミニク、あんた禁術をかけられているよ。解いてあげる」

そう言うと、私はドミニクへ手をかざした。すると、ドミニクの首の痣が光り、その色を変えていく。解除するだけとはいえ、魔法をかける逆の手順を踏まなければならないので、この作業には、相当の集中力を要する。

「あああああっ……！」

ドミニクは苦悶の表情を浮かべ、叫び声を上げた。きっと苦しいのだろう。

痣の色は徐々に薄くなり、やがて完全に消えた。

痣が消えると同時に、ドミニクは気絶してしまったようだ。彼は、分厚い瞼を固く閉じている。禁術は、解く際に相手にかなりの負担をかけるらしい。

「禁術解けたよー。ドミニク、気絶しちゃったけど……」

「大丈夫じゃないの？」

私が報告するも、アシルの態度は素っ気ない。気絶しているドミニクの拘束を解いてから、私達は地下室をあとにした。

「カミーユ、ありがとう。ドミニクの禁術がどういった経緯でかけられたのかも調べないとね」

「そうだね。今日はデボラの結婚式だったっていうのに、色々あったなあ」

集中力を使い果たした私の体を支えているアシルが、耳元にそっと唇を寄せる。



「早く、俺達も結婚式を挙げたいね」

色っぽく囁くアシルに耳まで真っ赤になった私は、ぱくぱくと口を動かすことしか出来なかった。

結婚式の数日後。私は、王太子であるロイス様に呼ばれて、アシルと一緒に城へ出向いた。

やっと、城の図書室にある禁術書の閲覧許可が出たらしい。

ロイス様の自室の白いテーブルの上には、お茶とお菓子が並んでいる。美味しい紅茶に、メレンゲ菓子……余は満足じゃ。

「遅くなってゴメンね、カミーユ。ほんっとわからず屋の頭の固い連中ばっかりで……僕もまだまだだなぁ」

なにがあったのだろうか、ロイス様が静かに腹を立てている。彼は笑顔で怒るから、ちょっと怖いんだよね……怒ると一番恐ろしいのはアシルだけれど。

「三人分の閲覧許可を貰ってあるから、一緒に行こう。アシルが頑張って許可証をもぎ取ってきてくれたんだ」

「ありがとう……って、三人分!?　禁術書を閲覧するのは、私だけじゃないってこと

ですか？」
「僕とアシルも行くよ。僕らだって見てみたいものねー？　アシル」
「そうですね、禁術に対処できる人間は多い方がいいですし」
真面目ぶって常識論を言っているけれど、アシルもロイス様と同じように好奇心で見てみたいんだと思う。
そんなことを考えていると、アシルが私の胡乱な目に気付いて苦笑いした。ほら、やっぱりね。
「だって、カミーユだけを、危険な目に遭わせるわけにはいかないでしょう？」
そう言って、こちらに近付いて来た婚約者は、私の齧りかけのメレンゲ菓子を取って頬張る。
（かっ、かかかか間接キス……！）
私は、顔を赤らめながら、アシルに抗議の視線を送る。やっぱり、いつになってもアシルのこういった行動には免疫が付かない。
「いいなぁ。僕も、好きな子にそういうことをしてみたいよ」
私達の様子を見たロイス様が、的外れな発言をしている。
アシルは複雑そうな顔をしてロイス様に視線を向けた。対するロイス様は、いつもの



キラキラした笑顔だ。
「ロイス様、好きな人が出来たの？」
彼に質問しつつ、私は新しいメレンゲ菓子を手に取って齧った。
「ああ、この際だからカミーユにも知っておいてもらおっか。アシルには、もう言ってあるのだけれどね」
爽やかに笑いながらこちらを向くロイス様に、私は言いようのない不安を覚える。
（……ま、まさか、ロイス様の好きな人ってヒロイン!?）
私が社会的に殺される事態は勘弁してほしい。
今後の心配をした私がおろおろしていると、アシルが相手の名前を教えてくれた。
「お相手は、カミーユもよく知っている令嬢だよ。ダイヤクラスのベアトリクス・タパス伯爵令嬢」
その意外な人物の名前に、私は目を丸くした。そんな私に、ロイス様が楽しげに言う。
「まさかの一目惚れをしちゃってね。あの時ピクニックに誘ったのも、そういうわけなんだ」
全く気が付かなかったよ！　ロイス様とアシル、ベアトリクスとピクニックに行った日の私は、ロイス様が私のために仲がいい彼女を誘ってくれたと思い込んでいた。

「殿下、そろそろ……」
アシルの声に、ロイス様は滑らかな動作で椅子から立ち上がる。
「そうだね。カミーユ、アシル、今から図書室に行こうか」
丁度紅茶を飲み終えた私は、立ち上がってロイス様に微笑みかけた。
「はい、行きましょう！」
私達は、一緒に並んで図書室へと向かう。城の図書室は西棟の端にある。東棟は、城の中で国王派がたむろする建物だが、対する西棟は王弟派がウヨウヨいる建物だ。
（どうしてこんな場所に図書室を作ったのだろう、ふたつの棟の間にある中央棟にすればいいのに。そういえば、ライガのくれた本も、元々王弟派が勝手に所持していたものだよね）
彼から貰った「禁断魔法全集」……アレはちょっとどころではなく、ヤバい代物であった。出るわ出るわ、人道に反した鬼畜な魔法の数々。編纂者はよくもまあ、あそこまで危険な禁術ばかり集めたもんだ。
城の図書室は、使える者が限られているので人が少なく静かだ。私も、たびたびここを利用させてもらって、禁術書コーナーに無断で侵入することもある。
「カミーユ。今日はちゃんと鍵を貰っているから、鍵破りはしないでね」



「ロイス様！　私だって、いつも鍵破りしているわけではありませんよ？」
図書室の螺旋階段を下りて、一番下のフロアの突き当たりの扉に入る。薄暗く、埃っぽい部屋の中には禁術書の棚が規則正しく並んでいた。
「クレール嬢にかけられた禁術をこの中から探し出すのは、骨が折れそうですね」
アシルの言う通り、気まぐれに魔法書を読みあさるのとは違って、ひとつの魔法だけを探し出すという作業は面倒だ。私は、古びた本の背表紙をひとつずつ確認していく。
すると、きょろきょろと周囲を見回していたロイス様が、ある棚の前で足を止めた。
「ここ……不自然に埃が拭われている」
彼が指さす方を見ると、埃まみれの棚の中で、一ヶ所だけ埃が拭われている部分があった。
それを確認したアシルが、不思議そうに呟く。
「本当だ、指のような形が残っていますね……まだ新しい。カミーユかな……？」
「ち、違う！　私じゃないよ！　こんなバレバレの証拠残さないってば！」
禁術書を見るのに、そんな跡を残したら「誰かが侵入しましたよ」と言っているようなものだ。私は禁術書が見られなくなるようなヘマはしない。
「ということは、他に誰かが侵入した可能性が高いか……」

私以外で、鍵破りしてまで禁術書を読みたがる人物って……お父様!?

「それにしても、これだけ侵入され放題なんだから、王宮の鍵は全部取り替えた方がいいと思いますよ」

アシルがもっともなことを言ったので、私も彼に便乗してみる。

「アシルに一票です！　城の警備と鍵はザルすぎる！」

「……前科者のカミーユがそう言うのだから、そうなんだろうねえ」

私の存在が、ことの信憑性を高めるのに一役買っているようだ。

「本を盗られた跡はないみたいだけれど……あとで司書に確認させようか」

「そうですね、図書室利用者の名簿も調べておいた方が良さそうです。まあ、手続きを踏まずに侵入されていたら無駄ですけど」

ロイス様とアシルの間で犯人特定についての話が進む。

私はとりあえず、指の跡の残る場所にある魔法書を捲り、クレールの禁術について調べることにした。

（犯罪者に口を割らせる禁術……違う。相手の心を読む禁術……違う。相手を虜にする禁術……違うけど、これ怖いな）

本当に禁術にはロクなものがない。ページを捲るたびに、その内容にげんなりさせら



れる。

しばらく本の内容を確認していると、やがて見覚えのある記号が目に入った。

「見つけた……クレールの首にあった模様だ！」

憎悪の感情を増幅させる禁術の上から、上書きされていた謎の禁術の模様。これは……

「口封じの禁術……？」

私は、素早くそのページを読み進める。そこに書かれていたのは、気分が悪くなるような内容だった。

「カミーユ、どうしたの？　なにか見つけたの？」

ロイス様に声をかけられた私は、コクコクと首を縦に振って彼の質問に答える。

「……クレールにかけられていた禁術を、見つけました」

口封じの禁術――術者に関する不都合な真実を、一切話させないために施す魔法だ。術をかけられた者が一言でも真実について話そうとすると、その瞬間に命を落とす。故意に話した場合はもちろん、そうではない場合でもだ。

横から本を覗き見してきたアシルも、その整った顔を顰めている。

「ロイス様。あのあとクレールは、事件についてなにか話をしていましたか？」

「いいや。糸が切れたみたいに黙り込んで、なにも話さないらしいよ」

ロイス様の言葉に、私はひとまず安堵した。なにも話していないということは、彼女はまだ生きているということだ。

クレールにかけられた禁術の内容を知った私は、その後、さっそく彼女のもとへ向かうことにした。

薄暗い地下牢は、華やかな城の中とは別空間のようにじめじめとしていてカビ臭い。先日のドミニクにしろクレールにしろ、罪人を閉じ込める場所は地下が好まれるようだ。しかし、この年季の入った地下牢に比べれば子爵家の別邸地下室は遥かにマシである。

数人の看守達に連れられた私は、クレールのいる牢屋に辿り着いた。心配性な婚約者も一緒に来ている。

城の地下に幽閉されているクレールは、糸の切れた人形のように動かず、虚ろな表情をしていた。この症状は、禁術の副作用だ。

憎悪の感情を増幅させる禁術をかけられた人間は、憎しみや怒り、悲しみの感情が止めどなく増す。もし、その感情が増大し続けて、本人の感情の許容量を超えてしまえば……彼女のように、すべての感情が抜け落ちた抜け殻状態になってしまうのだ。回復するには、かなりの時間がかかるだろう。

「クレール？」



私は、彼女にゆっくりと話しかけながら、慎重に近付いていく。クレールの両手には、重そうな金属の枷が嵌められていた。令嬢には辛い重さのはずだが、クレールの表情からはなにも読み取れない。別の牢にいる伯爵も同じように幽閉されている。報告では、彼の方は腕が痛いやら腰が痛いやら、中々賑やかにしているらしい。

「あなたにかけられている魔法を、今から解くよ？」

一応断りを入れたが、やはりクレールは無反応だった。まずは口封じの禁術を、続いて憎悪増幅の禁術を丁寧に解いていく。ドミニクの時と同じように、クレールも苦しみのあまり叫び出すかと予想していたが、彼女は白目を向いて口をパクパクさせているのみだった。叫び出す気力も、既にないのかもしれない。

看守達は、禁術を解いている私を驚愕の表情で見つめている。

「ふう、終わった！」

クレールの首の痣が完全に消えると同時に、集中力の切れた私は後ろによろけてしまった。禁術を解くのに、魔力をたくさん使ったせいかもしれない。同行しているアシルが、慌てて私の背中を支える。

「あ、ありがと。慣れない禁術を、同時にふたつも解いたからかな……ちょっと疲れたみたい」

アシルは、私の膝下に腕を差し入れると、一息に抱き上げた。いわゆるお姫様抱っこである。
「ちょっと、アシル!?　恥ずかしいから下ろしてよ！　皆に見られているし……」
「またふらついたら大変でしょう？　ほら、動いたら落ちるから、大人しくしていて？」
そう言う割には、彼は安定した抱き方で私を運んでくれていた。甘い笑みを浮かべるアシルは、私の頬に音を立てて唇を落とす。こんな場所でキスされるなんて、恥ずかしくていたたまれない。
「ねえ、アシル。私、やっぱり下り……」
「ダメだよ、ちゃんと掴まって」
「うう……」
有無を言わせないアシルに逆らえず、私は言われるがまま彼の首に両腕を回したのだった。

クレールの禁術を解いた数日後。私は空を飛んで移動するため、巨大化させた羽ペンに跨がってジェイド家の別邸を目指していた。夏期休暇が終わらないうちに、一度クローバーのQ――オーレリアに会いに行こうと思ったのだ。



あれから、クレールの容態は徐々に回復しているらしい。まだなにかを話すことはないみたいだけど。
「オーレリア、いる？」
別邸の玄関に降り立った私を迎えたメイドさんが、慌ててオーレリアを呼んでくれた。
「ああ、あの時の……アシル様の婚約者やんなぁ？」
「そうだよ。この間は色々ありがとう！　……ちょっと話があるんだけど、二人になれる？」
「話？　心配せんでも、アシル様に色目を使ったりは……」
「そんな心配はしていない。そうじゃなくて……！」
私は、首を傾げるオーレリアを引っ張って別邸の庭へ出た。
「オーレリア、急に変なことを聞くかもしれないんだけど……もしかして、あなたは別の世界から来た人？」
目を見開いた彼女に、私は質問を続ける。
「ここに来る前は、別の人生を歩んでいなかった？　ある日、急にこの体になったんじゃない？」
「……なんで、それを？」

オーレリアは驚きの表情で私を見た。私の顔もアシルの顔も知らなかったということは、彼女はメイと同じように、ゲームの知識を持たずにこの世界へ来たのかもしれない。

「私も、別の世界にいたから。以前は女子高校生だったの」

彼女にこの話をするにあたって、自分の正体を明かすかどうか悩んだのだけれど……私は、それを実行することにした。平民で街医者のお嬢さんであるオーレリアなら、万が一違っても、噂などを立てられることはないと踏んだのだ。

「……ははは、この世界で女子高校生なんて言葉を聞くとは思わへんかったわ」

乾いた笑いを漏らすオーレリアは、懐かしそうに目を細めた。以前の生活を思い返しているのかもしれない。

「そうやなぁ、私も以前は別の場所で暮らしとった。子供もおったし。私、前の世界では五十五歳やったから」

「五十五歳!?」

「旦那と離婚して、女手ひとつで子供育てとった経験もあるねんで。それが……ある日突然子供になっていて、焦ったわ」

オーレリアは、今の見た目よりもだいぶ年上だったようだ。ため口でいいものか迷ってしまう。

「じゃあ、お子さんは？　ええと……ダ、ダイジョウブナノデスカ？」
「大丈夫や。もう家を出て就職してるし……嫌やわぁー。侯爵家のお嬢さんが、私に敬語なんか使って！」
　オーレリアがおかしそうに笑い出したので、やっぱり普通に話すことに決めた。
「……そうだ。オーレリアは以前、魔法学園を受験していたよね」
　ベアトリクスの話では、彼女は私達と同時に王立魔法学園を受験して落ちていたそうだ。
「あれは記念受験や！　エリートな魔法学園がどんな場所か、一度見てみたかってん！　なにかの間違いで受かったら通おうとは思っててんけど、やっぱアカンかったわ」
　オーレリアの言葉に、私は思わず脱力する。そんな理由で受験していたのか……
「魔法学園については、以前から知っていたの？」
「この国では、有名やからなあ」
「……前の世界で乙女ゲームをした経験は？」
「乙女？　ゲーム？　娘は色々ゲームをしとったけど、私はしたことないわ」
　やはり、オーレリアにゲーム知識はないようだ。
「でも、嬉しいわぁ。同じ出身地の記憶を持ってる人間がおるってええもんやなあ」



立ち読みサンプル
はここまで

　そう言ったオーレリアは口元を綻ばせて、しばらくなにか考えている風だった。
「あのね、今日はこの前のお礼もあったんだけど、本当はオーレリアについて知りたかったんだ。じゃあ、私はアシルに見つかる前に行くね。同じ世界の出身者同士、なにか困ったことがあれば力になるよ」
　私は持参したお礼の品をオーレリアに手渡すと、羽ペンに跨がった。今日はアポイントなしで訪問したのだが、耳聡いアシルにはもうバレていることだろう。
「あ、ちょっと待って」
　不意に、オーレリアが私を呼び止めた。
「噂にすぎへんのやけど……アンタは今、貴族のお嬢様やろ？　そやから、ちょっと忠告しとこうと思って……」
　周囲に人がいないことを確認すると、オーレリアは小声で私に言葉を告げる。
「最近、王族や貴族に反感を持ってる平民達が多くなってきてな、一部では過激な組織も動いてるみたいやねん。この前、それで巻き添え食らって怪我した人がウチの実家の病院に運ばれて来たんよ」
「王族や貴族に反感？」
「そ。『平民達の暮らしをそっちのけにして、内部争いばかりしている組織は不要』っ